第３部:魔女の里編
第17章:ウイッチヴィレッジ
　里についてしばらく歩くとアイリーンと同じくらいの歳の魔女に遭遇した。魔女は俺に向かって話しかけてきた。
魔女1:「アイリーン。久し振り。戻って来たんだね。その男の人は人間なの？」
アイリーン in タカ:「あ、あたしがアイリーンなの💕」
タカ in アイリーン:「はい。俺はタカです。アイリーンのカラダを借りています。」
魔女 1:「入れ替わってるんだね。ってことはあれをやったのね。タカ君、何もないところだけどゆっくりしていってね。」
　魔女は驚くこともなく笑顔で去って行った。

タカ in アイリーン:「思ってたのと違って友好的だな。」
アイリーン in タカ:「ほとんどの魔女は人間を無暗に襲ったりはしないわ。生きていくために生気をもらうけど、」
タカ in アイリーン:「魔女って女だけだろ。どうやって子孫を増やしてきたんだ。」
アイリーン in タカ:「魔族や人間の男を恋に落として結婚して精をもらって妊娠するの。魔族はあたしたちとライフサイクルが似ているからその後一緒に生活することもあるけど、人間の男はなかなかこの里に定着しなくてね…ここに来ても人間の世界に戻ってしまったり、ここで病に倒れたり、魔族に命を奪われたりして今は誰もいないわ。」

タカ in アイリーン:「俺たちみたいにカラダを交換したままっていうこともあるのか？」
アイリーン in タカ:「一時的にはあるけど、ずっと入れ替わったままっていうのは聞いたことがないかも。魔女にとって「人間の男になる」ってメリットもないし…男の方から進んで魔女になりたいなんて…タカ、あなたはもの好きだわ(笑)」

　そんな話をしながら俺たちは郊外にある一軒家を訪れた。そこには茶色のショートヘアにシックな魔女のローブをまとった女性がいた。
師ソフィア:「久し振りね…アイリーン。」
　その女性は俺のカラダとなっているアイリーンにそう話し掛けた。
アイリーン in タカ:「さすが師匠～。入れ替わっていてもあたしがアイリーンだってわかるんですねっ💕」
師ソフィア:「…男がそんな乙女チックな所作で近づいてくればわかるわよ。それにそっちのアイリーンは男のような歩き方をしていたしね…」
アイリーン in タカ:「タカ、紹介するわ。あたしの師匠のソフィアよ。」

アイリーンよりも幼そうな顔だちをしているが、アイリーンの師匠ということは、アイリーンよりも魔力が強いのだろう。でもこの人が人間を襲っているという話を聞いたことはない。

タカ in アイリーン:「初めまして！タカと申します。アイリーンさんとは数日前に知り合って良いお付き合いをさせていただいております！」

ソフィア:「なぜ結婚報告するみたいな挨拶なのかしら(笑)」

第 18 章:魔法の初級教育

ソフィアは笑顔となり話を続けた。

ソフィア:「タカさん、あなた長い時間アイリーンのカラダに乗り移っているようね。アイリーンのことを気に入っていなかったらできないことだわ。いい人を見つけたようね。アイリーン。あなたもそろそろ身を固める頃かしら。今日はその報告だったの？」

アイリーン in タカ:「いえ、師匠にもう一度稽古をつけて欲しいんです。」

タカ in アイリーン:「ソフィア先生、お願いします！俺はアイリーンとして強くなりたいんです！」

師ソフィア:「わかったわ。話が長くなりそうね。中に入って話しましょ。」

俺たちはソフィアの家に入れてもらった。ソフィアは椅子に腰かけると、俺たちも椅子に座るように促した。アイリーンは俺の肉体で足を横に流して上品に座っている。俺も膝をぴったりと

くっつけて、スカートを気にしながら椅子に座るとソフィアにこれまでのことをすべて話した。ソフィアを見て話していると、心が落ち着く。アイリーンの肉体に宿るもののせいなのか、それともソフィアの人柄なのだろうか。ソフィアは一通り話を聞くと、こう切り出した。

ソフィア:「事情はわかったわ…確かにカラダを交換すれば飛躍的に強くなる可能性はあるわ。でもその逆もある…アイリーン、魔法を構成するエレメントの話は覚えてる？」
アイリーン in タカ:「四大元素のほかに聖、闇ですよね。」
ソフィア:「そう、そしてそのエレメントはカラダだけでなく魂も構成されているの。カラダと魂が同じエレメントの場合もあるし、違う場合もあるわ。私はカラダは闇属性だけど魂は水属性、だから 2 つのエレメントが融合した結界魔法を扱うことができるの。」

アイリーン in タカ:「あたしはカラダは風属性、魂は火属性だから、2 つのエレメントが融合した雷魔法を扱えるってことですよね。」
ソフィア:「タカさん。あなたのカラダは水属性、そして魂は土属性。だからあなたがアイリーンのカラダに乗り移ることで風属性と土属性の融合でアイリーンが使えなかった新たな力が手に入る可能性があるわ…」
タカ in アイリーン:「ソフィア先生、俺はどんな魔法を扱えるようになるんですか？」
ソフィア:「重力魔法や時魔法よ。」
アイリーン in タカ:「え…メテオとかリバースとか？」

ソフィア:「それは究極魔法だから、習得できたとしてもかなり時間が掛かるけど、初級だとグラビティとかスロウね。それでも短期間で習得するのは大変よ。頑張れる、タカさん？」
タカ in アイリーン:「はい！ソフィア先生、俺、努力するので、いっぱい教えて下さい！」

第 19 章:幼馴染
ソフィア:「まずは肉体と魂の融合をする必要があるわ。当たり前だけど、私はこの自分のカラダを自分のものだと思っている。でもタカさんはそのカラダをアイリーンのものだと、アイリーンもそのカラダをタカのもので、お互いに借りているだけって思っているでしょ。その状態だと肉体と魂の融合はできないの…」
タカ in アイリーン:「俺がアイリーンのカラダを使いこなせばいいんですね！」

ソフィア:「そうよ。でも気をつけて、自分がアイリーンだと思ってしまってはダメ…そうなると魂が肉体の属性に染まってしまうだけでなく、自我を失い、元のカラダにはずっと戻れない、いえ戻りたくなくなるわ…」
　ソフィアは何か昔を思い出すように遠くを見ていたが、再び俺たちに目を向けると、今の幸せを噛みしめるような笑顔になった。
アイリーン in タカ:「あたしもタカのこのカラダを使いこなせるようになればいいんですね。自我を失わずに。」
ソフィア:「魔王うジャに勝つためにはその可能性に掛けるしかないと思うわ…」

　突然、奥の方から女性の声がした。声のする方に目を向けると、桜色のポニーテールをした女性が厳しい表情でこちらを睨んでいた。
クララ:「いきなり戻って来たと思ったら男連れとはね。」
アイリーン in タカ:「クララ！」
クララ:「何しに来たの？」

アイリーン in タカ:「修行よ。」
クララ:「花嫁修行？(笑)」
アイリーン in タカ:「それもいいけど…でも相手がいない人には不要な修行よね。」
ソフィア:「相変わらず仲が悪いわね。幼馴染で同期の弟子だというのに…アイリーン、これから一緒に修行するんだからそんなに突っかからないで。クララも久し振りの再会なんだから仲良くしてね…」

クララ:「タカ…だったわね。魔法初心者みたいだけど、あたしの足を引っ張らないでね。」
タカ in アイリーン:「宜しくお願いします！クララさん。」

クララ:「なかなか素直じゃないの💕可愛がってあげるわ💕」

クララは一転して朗らかな笑顔となり俺の手をとった。それを見たアイリーンは殺意をマックスにして俺たちの方を睨んでいた。俺はクララから離れて一礼してその場を去った。先行きが不安なまま俺たちはクララと共に住み込みで魔法修行に励むことになった。俺とアイリーンは別々の部屋に泊まることとなり夜を迎えた。

第 20 章:夜のレッスン

夜も更けベッドに横になりうとうととしていると、部屋のドアが開き、中に誰かが入って来た。

タカ in アイリーン:「アイリーン？」

ソフィア:「私よ💕」

タカ in アイリーン:「ソフィア先生、どうしました？」

ソフィアは昼間見せなかった妖艶な表情を浮かべると、俺の、アイリーンの肉体を起こし、ネグリジェの上から胸をなぞるように指を動かしてきた。

タカ in アイリーン:「うっ…」

ソフィア:「うふっ💕いい反応ね。アイリーンのカラダには慣れた？」

タカ in アイリーン:「いえ…まだサンダーも使えず、女のカラダにも慣れていないです。」

ソフィア:「女のカラダはね、男と違ってまず重心が違うの。立ってみて。」

俺は立ち上がると、ソフィアは俺のカラダに触れてきた。
ソフィア:「男はあまり姿勢を意識していないと思うけど、女性のカラダは何も意識しないと胸とおしりを突き出すような姿勢になっちゃうの。そうすると胸と腰に負担が掛かり、カラダの違和感を加速させるのよ。」
ソフィアは、俺の下腹に手を触れ肉体の奥の方へ押し当てた。もう一方の手は俺のおしりに手を触れ、床に向かって押し当てた。俺は胸とおしりの重力感から解放された。そして重心の違和感もなくなった。

ソフィア:「どう？だいぶ楽になったんじゃない？」
タカ in アイリーン:「はい！」
ソフィア:「クララはとっつきにくい印象を受けるかもしれないけど、根はいい娘なの。アイリーンは外の世界へ、クララはここに残って修行をすることでお互いに道は違うけど、二人とも魔女の未来を考えて行動しているのよ。どちらも魔力はかなり強くていつか私を超えるでしょうね。お互いに進む道は違っているけど、目的は同じってことね。」

タカ in アイリーン:「そうだったんですね。そう言えば、ソフィア先生はどうして男女の重心の違いを知っているんですか…？」
ソフィアはその質問には答えず優しく微笑みかけた。
ソフィア:「長旅で疲れているでしょ。今日はぐっすり眠って明日からの修行に備えるのね。」
ソフィアはそう言うと、俺の部屋から出て行った。その様子をアイリーンが見ていた。
アイリーン in タカ:（ありがとうございます。師匠。）

俺はその夜、夢を見た。草原に立ち、風が吹くと俺を包み込む。俺は風と一体となる感覚となっていた。

第 21 章:魔女の自覚
翌朝、俺とアイリーン、クララは共に修行を開始した。
ソフィア:「タカ君、まずはアイリーンのカラダのエレメントである風魔法:ウインドを習得するのが良いと思うわ。」
タカ in アイリーン:「時魔法ではないんですか？」
クララ:「師匠のいうことが体現できていない今のあんたじゃ時魔法は無理よ。まずはアイリーンのカラダのエレメントを使いこなせるようにならないとね。」

アイリーン in タカ:「魔王と戦ったときは、タカとのシンクロ技が出せたけど、他にも技の種類

を増やさないと…あたしは炎系と水系の魔法を使えるから、それを剣に乗せる練習をしてみるね。」
ソフィア:「アイリーンは元から使えた炎系の魔法にタカ君のエレメントの水系の魔法もすぐに使いこなすなんてすごいわね。」
クララ:「昔から覚えるのだけは早かったからね。」
ソフィア:「クララも適応力は凄いわよ。男の子に憑依していきなり時魔法を発動させたことがあったよね。」
クララ:「あのときはそうしないと、だったから…」

ソフィア:「タカ君、あなたはまず…」
　ソフィアは俺の背後に回り後ろから俺の胸を揉んでいる。
タカ in アイリーン:「ひゃん…」
　アイリーンは俺の前に来て手鏡を開いて見せた。鏡にアイリーンの顔が映る。
タカ in アイリーン:「アイリーン…」
ソフィア:「違うわよ…俺はタカだ、って鏡を見て言ってみて。」
タカ in アイリーン:「俺はタカ…俺はタカ・・・」
　俺の言葉に合わせて鏡の中のアイリーンの口が動く。この愛らしい瞳も、魅惑的な唇も、艶やかな髪も俺のカラダなんだ。揉まれているこの胸も俺のモノ。アイリーンが俺の元に来ておしりを撫でる。びくっとカラダが自然に反応する。こんな風に感じてしまうのも俺なんだ…

アイリーン in タカ:「そう…そしてこのカラダはあたしのモノ。あたしは碧の騎士、アイリーンよ！」
タカ in アイリーン:「アイリーンは碧の騎士…俺は…」
ソフィア:「あなたは蒼の魔女タカよ！」
タカ in アイリーン:「俺は…蒼の魔女…」
ソフィア:「いい感じよ！さあウインドを発動させてみて！」
タカ in アイリーン:「はい！…ウインド！」

俺の手からウインドが発動する。
ソフィア:「できたでしょ？今までできなかったのは自分が魔女だという自覚がなかったから…こうして自覚を持つだけで初級魔法を発動できたのだから、あなたには才能があるわ。」
俺はソフィア先生に才能があると言われて嬉しくなった。俺は騎士よりも魔女の方が適性があるんだ…
クララ:「魔女であることの自覚をこんなに早くに持てるなんて…なかなか素直じゃないの。アイリーンがそのカラダにいたときよりも強力な魔女になるかもね。」

第 22 章:三銃士襲来
俺たちは 3 箇月ほど修行を続けてきた。季節は変わり桜が満開を迎えている。今では俺はウインドを使いこなせるようになり、更に風の上位魔法のトルネードの習得しかけている。アイリーンは剣の腕を磨き、今では元の俺と互角くらいの実力となっていた。しかし、そんな平和な日常が突然壊されることになる。いつものように外で 3 人で修行をしていると、ソフィアが異変を感じ取った。
ソフィア:「！…大量の魔物が敵意むき出しでこの里に向かってきている…何故？……私は里に魔物が侵入する前に結果を張って防ぐわ！あなたたちは里のみんなの様子を見てきて！」
俺たちは二手に分かれてクララは東へ、俺とアイリーンは西を向かった。すると途中の広場で存在感のある男に出会った。おそらくこいつがボスだろう。

～広場～
スルト:「俺は魔王軍三銃士のスルト。タカとアイリーンだな？」
アイリーン in タカ:「三銃士…何故あなたがここに？」
スルト:「タカとアイリーン、お前たちを倒すためだ。」
タカ in アイリーン:「魔王の指示ということか。」
スルト:「いや俺の独断だ。お前たちがカラダを入れ替えているというのも知っている。これ以上お前たちを成長させる訳にいかない。俺のグングニルを受けてみろ！」

スルトはそう言うと俺たちに詰め寄って来た！アイリーンはエクスカリバーを振るいグングニルを受けようとするがかすりもせず、腕に傷を負ってしまう。

アイリーン in タカ:「…速い！」
タカ in アイリーン:「アイリーン、俺に任せろ！ウインド！」
ウインドはスルトを直撃する。だがスルトは何事もなかったように平然としている。
スルト:「舐めているのか？ウインドごとき避けるまでもないわ！」
アイリーン in タカ:「長引くと不利ね…一気に決めるわよ！タカ！」
タカ in アイリーン:「ああ…」

俺はウインドをアイリーンのエクスカリバーに宿す。魔王と戦ったときのようにエクスカリバーが緑色に輝く。
アイリーン in タカ:「行くわよ！エメラルドブレイド！」
しかし渾身の剣もスルトのグングニルが軽くあしらってしまう。
タカ in アイリーン:「そんな…エメラルドブレイドは現時点で最強の技…全く通じないなんて…」
スルト:「これがお前たちの必殺技か…これでネタ切れたとしたら拍子抜けだな。」
スルトの槍が再びアイリーンを襲う。アイリーンはその連続攻撃に両足も負傷してしまう。続けて俺もグングニルの発する衝撃波によって全身を切り裂かれてその場に倒れてしまった。スルトの容赦ない攻撃が二人を追い詰める。

第 23 章:舞い踊る華
　そこへクララが戻ってきて俺たちと合流した。
クララ:「安心して、村のみんなは無事よ。敵はここの一人だけよ。」
アイリーン in タカ:「良かった…でもこのスルトが強敵で全然歯が立たないの…」
スルト:「実力差は歴然だな。諦めろ。今楽にしてやる。まずはタカ、お前からだ。」
タカ in アイリーン:「アイリーンからもらったこのカラダ！簡単にやられてたまるか！」
　俺はスルトのグングニルを避けようとするが、避けきれず徐々に肉体に傷を増やしていった。このままでは何もできずに倒されてしまう…何か策はないのか…

クララ:（あたし一人ではスルトと渡り合うことはできない。師匠は結界を張って魔物の村への侵入を防いでいる。アイリーンとタカは今までの攻撃で満身創痍の状態…）
　クララはしばらく思いつめた表情をしていたが、覚悟を決めたように声を挙げた。
クララ:「…アイリーン、あんたは昔から気に入らなかったけど、あたしたちのために色々と動いてくれていた。これからもあんたは私たち魔女を導いてくれるはず。だからあんたをここで死なせる訳にはいかない！」
アイリーン in タカ:「クララ？何を？」

スルト:「トドメだ！」
クララ:「…タカ…アイリーンのことを頼むよ！」
　クララは俺にそう言うと俺の前に出た。間髪を入れずにグングニルがクララの腹を貫く…
スルト:「くっ、仕留めそこなったか！だが次は…」
　スルトはグングニルをクララから抜こうとするが微動だにしない。クララは俺たちの方へ振り向き笑顔になるとある魔法を発動させた！クララの肉体が輝きだす。
クララ:「あたししかできないこと…だからね…」

～回想～
過去のソフィア:「クララ…魔女にはそれぞれ得意な領域があるって話はしたでしょ。」
幼クララ:「うん。あたしはカラダが火、魂が土のエレメントよね。」
過去のソフィア:「そうよ。火は攻撃、土は防御、相反する 2 つのエレメントから多彩な魔法が生まれるわ。その中の 1 つに“サクリフィーシオ”があるの。でもそれだけは使ってはダメよ。」
幼クララ:「どうして？相手に致命的なダメージを与える強力な魔法なんでしょ…」
過去のソフィア:「そのエネルギー源は自分の生命なの。だから発動した者はまず助からない…そうなれば周りの者が悲しむわ…」
幼クララ:「そんな魔法がどうして存在するの？」
過去のソフィア:「それはね…」

第 24 章:犠牲と覚醒

過去のソフィア&クララ:「大切な人を守るため！その発動条件はその心を強く持つこと！」

過去のソフィアとクララの言葉がシンクロする。

クララ:「師匠、今ならこの魔法の存在意義がわかります！今この状況を打開できるのはあたしだけ…」

スルト:「これは…犠牲魔法…わかっているのか？それを使えばお前は確実に死ぬんだぞ。」

クララ:「どのみちあたしは助からない。お前を道連れにできるなら本望だ…未来の礎となると思えば怖くない。これがあたしの最後の魔法…サクリフィーシオ！！」

クララの肉体から放射状に光が放たれる。その光は一瞬でスルトを貫き、満開の桜のトンネルを駆け抜け空にも達した。その衝撃を受けて満開だった桜の花が散り始める…

～郊外～

ソフィアは郊外でその眩しい閃光を確認した。

ソフィア:「え…この放射光は…犠牲魔法サクリフィーシオ？まさか…クララ！！」

～広場～

スルトは無数の光の刃によって倒れた。

スルト:「俺がこんなところで…」
　クララも地面に崩れ落ちる。だが…スルトはよろめきながらも立ち上がる。
スルト:「かなりの深手を負ったが何とか助かったようだ…」
アイリーン in タカ:「そんなクララが命を懸けたのに…」

　クララはぴくりとも動かない。俺が力不足のためにクララがこんなことに…
タカ in アイリーン:「～～～～～！！」
　俺は絶叫した。クララへの想いがアイリーンの肉体とシンクロする。それに応じるように俺の肉体が魔力に溢れる。これは…今までにない新しい力！でもどうやって扱えば……そんな俺の前にクララが、いやクララの幽体が現れる。

クララ:「ついに覚醒したね。あんたの得意領域の時魔法。今ならストップが使えるはず。一定時間相手の動きを止めることができるから、その間にアイリーンがエメラルドブレイドでスルトにトドメをさすんだ。」
タカ:「でも俺には使い方がわからない…」
クララ:「仕方ないね…あんたのカラダ借りるよ。そして良く覚えておくんだ。あたしが教えてあげられるのはこれが最後だからね…」
　クララの幽体が俺のカラダに乗り移る。

クララ in タカ＆アイリーン:「アイリーン、これからあたしがストップの魔法でスルトの動きを止める。その後はわかっているね。さあ、行くよ、タカ。あたしに合わせて詠唱して！！」
　頷くアイリーン。
クララ＆タカ in アイリーン:「偉大なるときの番人よ。我が願いを聞き入れ、スルトの動きを封じよ！ストップ！！」
スルト:「今度は時魔法だと？聞いていた話と違う！こんな魔法をお前たちが使えるとは…」
タカ in アイリーン:「アイリーン、ウインドだ！」
アイリーン in タカ:「タカ、受け取ったわ！あとは任せて、クララ。」

第 25 章:土に還る華
　アイリーンのエクスカリバーが緑色に輝き、エメラルドブレイドが一瞬でスルトを切り裂いた。
スルト:「3 人の連携とは…見事だ！…すまない…ナター…」
　スルトは何かを言い掛けて完全に消滅した。そしてそれに呼応するように里の外にいた魔物もすべて消滅した。

～郊外～
ソフィア:「あの子たちがボスを倒したのかしら…でもさっきの魔法は…」
　ソフィアはテレポで広場に移動する。そこにはアイリーンとタカが物言わず立ち尽くし、笑顔で倒れているクララがいた。そしてその上空にクララの幽体がいた。ソフィアは何が起きたかを瞬時に察した。
ソフィア:「クララ・・・やはりあなたがあの魔法を…」
クララ:（どうやら上手く行ったようだね…）
　ソフィアは愕然として立ち尽くす。

クララ:（師匠…あたし…みんなを守れましたよ！）
ソフィア:「ええ…見事だったわ。でもあなたが犠牲になるなんて…あなたにもまだこれからの未来があるのに…」
アイリーン in タカ:「クララ…ありがとう…勝てたのはあなたのお陰よ…でもこんな…師匠！クララを元の肉体に戻すことはできないんですか！」
ソフィア:「残念ながら…里の魔女で蘇生魔法を使える者はいないわ。それに…」
クララ:（ええ…もうあたしの肉体は機能していない。リヴァイブを使ったとしても無駄なのよ…師匠、それにみんな、そんな顔をしないで…名残惜しくなるじゃない…）

タカ in アイリーン:「クララさん、このカラダに乗り移って共に生きることはできないのか？」
クララ:（それは…できないわ。）＜できたとしてもそんなことをする訳ないじゃない…＞

その場にいた全員が言葉に詰まる。
タカ in アイリーン:「クララさん、ストップの魔法を習得できたのはあなたのお陰だ…あなたの想いは俺たちが引き継ぐ！」

俺たちは涙を拭き笑顔をクララに見せた。クララも安心したように笑顔で返す。
クララ:「師匠、今までありがとうございました。アイリーン、タカ、あとは頼むよ…」
クララの幽体が消える…

その日のうちに村の魔女たちにも三銃士撃退とクララの悲報が伝えられた。魔女たちは激しい戦闘があった広場に集まりクララの死を惜しんだ。桜の花びらが名残惜しむように舞っていた。

俺たちは三銃士の一人、スルトを激闘の末倒し、魔女の里の平和は守られた。でもその代償は俺たちにとってあまりにも大きかった。戦いが起これば勝っても、このような悲しみの連鎖が発生してしまう。戦など何も良いことはないのだ。俺たちはクララの墓標を前に戦をなくすことを誓い、再び魔王討伐の決意を新たにするのだった。

魔法のエレメントについては、設定したものの、理解したり、覚えたりしなくても物語が楽しめるように展開していきますので、ご安心ください。
苦労しながらも成長していくタカとアイリーン。強敵スルトを撃破したものの、クララを失うという結末となってしまいました。クララは最初、とっつきにくい印象でアイリーンを敵視している様子でしたが、アイリーンのことをずっと認めていたのではないかと思います。クララは発言していないものの、魔女の里の未来だけでなく、アイリーンとタカの未来も思い描いたうえでの行動だったのかもしれません。そのように想像すると切ないですね…
「誰かのために犠牲になる」行為というのは、美しく描かれてしまいますが、残された者の哀しも測り知れなかったりします…三銃士の一角を失ったということで、魔王側も大ダメージのはずです。スルトにも大切な人がいれば、その人に同じような悲劇が起こっているはずです。戦争というのは、いつもこういった哀しみの連鎖があると感じています。
第4部はステージが変わります。気持ちを新たにアイリーンとタカの旅にご期待ください。